

「ゆさぶり」の手法を活用した「友情, 信頼」観の内包・外延の拡張

— 小学校道徳科における「ないた赤おに」を活用した模擬授業の分析を通じて —

宮本浩紀*・小林伸彦**・金子佳奈***・大竹宗***・津崎柊人***

(2025年3月7日受理)

Deepening and Broadening of the Concept of ‘Friendship and Trust’ through the Utilization of ‘Yusaburi’
Method: Through the Analysis of a Simulated Lesson on ‘Naita Akaoni’
in Elementary School Moral Education

Hiroki MIYAMOTO, Nobuhiko KOBAYASHI,
Kana KANEKO, Takashi OTAKE and Shuto TSUZAKI

キーワード: 特別の教科 道徳, 有名教材, 小学校, 模擬授業, 生命の尊さ

現在、学校教育で行われている「特別の教科 道徳(以下、「道徳科」とする)」では、「考え、議論する道徳」というスローガンが掲げられている。その主旨は、子どもが自分の頭で考えること、そして、それを他の子どもたちと共有することにある。これらを達成するために用いられる手立てとして文部科学省が掲げているのが、子どもが自分をみつめることであり、また、子どもが既存の知識や経験や価値観を超えて、他の子どもと道徳的価値や道徳的行動について議論することである。

本論文では、以上のような学習活動を促すべく、教師が用いる「ゆさぶり」の手法に着目する。「ゆさぶり」とは、教師が子どもの理解・思考に誤りや不十分な点を見出し、それを発問の形で示す教育学上の技法である。それは、授業実践上、とても重要な技法ではあるが、その成否は、あらかじめ行われる教材研究や日頃から培われた子ども理解なしには成り立たない。本論文では、特に子どもにとって身近な「友情, 信頼」に関する理解・思考を促す手立てについて考察する。

はじめに

本論文では、小学校における「特別の教科 道徳(以下、「道徳科」)」の学習において「ゆさぶり」の手法を活用することが、児童の道徳的価値観をいかに深め、広げるかについて考察する。具体的には、道徳読み物教材として小学校道徳科の教科書にも採用されている『ないた赤おに』(浜田廣介(浜田広介) 作)を基にした模擬授業を事例として取り上げ、その指導過程や児童の反応を分析し

*茨城大学全学教職センター

**茨城大学教育学部

***茨城大学大学院教育学研究科

ながら、「ゆさぶり」が子どもの思考に及ぼす効果と、「友情，信頼」の価値に関する深まりと広がりやをどう実現するかについて検討する。

道徳の授業が特別の教科として位置付けられたことにより、学校現場では「考え，議論する道徳」の授業づくりが求められるようになった。文部科学省は、「道徳科の目標」に関して、「道徳的諸価値についての理解を基に，自己を見つめ，物事を多面的・多角的に考え，自己の生き方についての考えを深める学習」をあげている。これは、子どもが道徳的諸価値に対して自分なりの意味づけを行い、それを広く社会や人間関係の中でとらえ直すプロセスを重視する学習につながる。

本論文で取り上げる「友情，信頼」という内容項目を例として、子どもはそれぞれ当該価値に関する知識や経験をもっている。本来はそれが子どもの学びを支えてくれるものとなるが、道徳科の授業実践においては、そのことが学習を妨げることになってしまうことがある。それは、当該価値に関して「すでに十分わかっている」あるいは「わかったつもりになっている」という思いを持つことにより、改めてその価値について考え直す機会が得られない恐れがあると思われるからだ。

そこで注目されるのが、「ゆさぶり」の手法である。子どもの思考や感情に混乱や揺れを引き起こし、既存の考え方を改めて見直すことで新たな視点や判断材料を獲得することは、道徳的価値を深める上で有効な手立てと考えられる。さらに、それを基にして、当該価値に関して自らがもつ理解を見極めることが求められる。その際に有効な視点として本研究が設定するのが、主に言語学の領域で研究蓄積のある概念の「内包」と「外延」である。自分の身の回り／自分の中で起こる事象を理解する際、人は言葉（語）を用いるものであるが、その言葉（語）の理解を「内包」と「外延」で捉える言語学上の立場は、まさに道徳科の授業で行われている理解のプロセスに重なる。

そこで本論文では、まず「ゆさぶり」という手法が道徳科の授業においてなぜ有効なのか、その理論的背景や子どもの発達との関わりを概観し、(概括的ではあるが)それを概念の内包と外延に結びつける。次に、『ないた赤おに』を活用した模擬授業の事例分析を通じて、具体的にどのような場面で子どもの思考に揺さぶりを与えられるのか、またそこから子ども（受講者）がどのように友情や信頼の価値を理解しうるかを整理する。最後に、こうした授業づくりの意義や課題を考察し、小学校道徳科における「ゆさぶり」の活用が持つ今後の可能性について言及したい。

1. 道徳科において子どもを迷わせ、子どもの思考を揺さぶることの意義

(1) 「ゆさぶり」の手法とは何か

「ゆさぶり」は、児童・生徒が学習内容や題材に対して持っている先入観や固定概念をいったん揺さぶることで、より深い思考を促す手立てとして位置づけられる。その広がりや、昭和の授業名人である斎藤喜博によるところが大きい²⁾。特に道徳科においては、道徳的価値を子どもが捉え直す上で自分自身の考えと他者の考えを往還させることが重要である。教師が意図的に迷いや葛藤の場面を設定することによって、子どもは「あれ、自分の思いや考えは正しかったのだろうか」

「もう一度考え直す必要があるのではないか」といった自問の機会を得ることになる。これは文部科学省が位置づける「考え，議論する道徳」の実現に結びつくものである。

発達にしたがい、そのような自問の機会を子ども自身が生み出すことができることが望ましい

が、それに慣れるまでは大人や周りの者からの手助けが必要である。そのような意味で、「ゆさぶり」は教育学者・発達心理学者のヴィゴツキー（Lev Semenovich Vygotsky, 1896-1934）の示した「最近接発達の領域（発達の最近接領域）」と関わりつつ、子どもが少し上の段階の理解・思考があることに気づくための支援と位置づけられる。

（2）「迷い」を通じて深まる「友情、信頼」の理解

道徳科の目標は、子どもが自己の生き方について多面的・多角的に考え、判断し、実践しようとする態度を育てることであると位置づけられている。しかし、「道徳的諸価値の理解」が自らの生活に位置づけられることは容易ではない。

教師が一方向的に道徳的価値の“望ましい”在り方を述べたとしても、子どもがそれを生かせないことがある。それは、子どもの理解・思考に課題があるというよりも、そもそも道徳的価値という抽象的な事象と当該価値に関する子どもの知識・経験と授業で活用する道徳読み物教材の間につながりをつけることが難しいことに起因している。

特に「友情、信頼」という道徳的価値は、子どもの学級生活や日常生活においても身近でありながら、非常に多義的な内容を含むものである。友だちを思いやることと自分の正直な気持ちを貫くこととのあいだで葛藤することもあれば、一度裏切られた信頼をどう回復していくかという課題に直面する場合もある。そのように多様な「友情、信頼」の内実は、子どもがそれを様々な場面設定や人物像の中で問い直すことによって、より深く広く理解することができる。

（3）概念の内包と外延を踏まえた「友情、信頼」の深まりと広がり

そこで、本論文が取り上げたいのが、主に言語学において研究蓄積がある概念の「内包」と「外延」の考え方である。非常に概略的ではあるが、前者の内包は「ある言葉が指し示すもの（「外延」）の様々な呼び方／イメージ」、後者の外延は「ある言葉が指し示すもの（五感で捉えられるものが多いといえる）」と位置づけられる。以上を基にして、「友情」や「信頼」という言葉（語）を捉え直すことで子どもの学習の目指すべきところが浮かび上がってくる。

「友情」や「信頼」は、日常生活において頻繁に用いられる言葉であるが、その内包を明確に定義するのは容易ではない。「友情」という言葉（語）は、互いを思いやる気持ちや相手の幸せを願う態度、互いが対等でありながら支え合う関係性といった特徴をもつものと想定される。また、「信頼」という言葉（語）は、相手の言葉や行動を信用して任せられる感情、相手は自分を裏切らないという確信を表すものと位置づけられる。

一方で、子どもたちにおけるその捉え方は一様ではない。「いっしょに遊べるのが友だち」「悪口を言わないのが友だち」といったように、個々人の知識や経験によって想定される「友情」「信頼」の外延は異なり³⁾、ひいてはそれが内包の違いを生むことにつながる。概念の内包と外延という考え方を踏まえると、道徳科の授業は、こうした言葉（語）について子どもたちが自分の知識・経験を想起し、それを表した言葉を理解し、また自分でも位置づけることで、当該価値の再構成を援助する役割を負うものと位置づけられる。

2. 「ないた赤おに」を活用した模擬授業の分析

(1) 「ないた赤おに」を活用するときのポイント

①教材のあらすじと活用の際の注意点

さて、本論文で取り上げる「ないた赤おに」は絵本作家の浜田廣介（浜田広介）氏が作成した絵本が基になっている。そのあらすじは次の通りである。

「ないた赤おに」のあらすじ

心優しい赤おには、人間たちと仲良くなりたいと願っていましたが、村人に怖がられてなかなかうまくいきません。そこでともだちの青おにが、自分がわざと悪者になる作戦を提案します。赤おにはその提案を断りましたが、青おには強く赤おにを説得しました。青おにが村で大暴れをし、赤おにがそれを止めてみせることで、事前の作戦の通り、赤おには村人たちの信頼を得ることができました。しかし、それから何日かたっても、青おには姿を見せません。心配になって青おにの家に行ってみると、手紙が貼ってありました。そこには、赤おにとの友情が知られると、人間に疑われるかもしれないから、遠くへ旅に出ると書いてありました。「ドコマデモ キミノ トモダチ」と書かれた手紙を何度も読んだ赤おには、そんな友達の思いを受けて涙を流しました。

同教材について分析を行った先行研究は多数にのぼるが、それらの主旨を管見の限りまとめてみると、「ないた赤おに」の教材研究及び授業実践のポイントとして、「友情とは相互に生み出し支え合うものである」という考え方があげられる。

この点について、加藤宣行・竹井秀文（編著）『実践から学ぶ 深く考える道徳授業』（光文書院，2015）の記載内容が示唆的である⁴⁾。そこでは、文部科学省『学習指導要領解説（平成29年告示）特別の教科 道徳編』にあげられた「友情，信頼」の目標に基づき、次の通り記述されている。

「互いに」という文言からもわかるように、相互作用のやりとりである。一方通行や独り善がりでは成り立たない。押しつけもだめだが、自己犠牲もだめである。

これは、「友情，信頼」の目標にある「友達と互いに理解し，信頼し，助け合うこと。」のうちの「〇〇し合う」というキーワードを受けて記載されたものである。「友情」は一方の人によって作り出されるものではなく、双方によって生み出されるものであるという点から、「ないた赤おに」を用いた授業において「自己犠牲」の精神を肯定的に認める展開が避けられている。

②本教材で深めたい道徳的価値について

「ないた赤おに」を通して、子どもたちは「友情，信頼」という道徳的価値について学ぶことができる。「青おにの嘘は友情と言えるのか」「赤おには本当に幸せになれたのか」といった問いを投げかけることで、子どもたちの理解や思考をゆさぶる手立てが考えられる。それにより、既存の「友

情はいいもの」「嘘は悪いもの」という枠組みにゆさぶりをかけ、子どもたちの中に迷いや葛藤を生じさせることが期待できる。

授業前に子どもが「友情」という言葉（語）に見出している外延は、例えば、「休み時間に一緒に遊ぶ人」や「放課後に遊びに行く人」、「一緒にいて楽しい人」といったものが多いと考えられる。一般に道徳科の授業では、これらは、授業前あるいは授業開始当初の導入のタイミングで聞かれるアンケートで確認されているものである。そのような外延を基にして生み出される「友情」の内包には「楽しい」「遊び」「一緒」といったキーワードが含まれることになるが、「ないた赤おに」では、そのような「友情」の内包の拡張を図ることができる。すなわち、「友情」を「相手を思いやり、ときには自分のリスクを引き受ける関係」へと再定義したり、「嘘」と「思いやり」のグレーゾーンを考察するなど、「友情」の内包をより複雑かつ深いものへと再構成することが期待されるのである。こうした過程を経て得られた「友情」や「信頼」の概念は、子どもが自らの知識や経験を振り返る時に役に立つことが期待される。そのような認識の深まりは、ひいては、子どもの日常の行動や態度に結びつくはずである。

(2) 本授業のねらいと展開

① 模擬授業の概要

本論文では、小学校四年生を想定して「ないた赤おに」を活用した模擬授業を実施した。模擬授業には、県教育委員会より派遣された現職教員2名と学部卒のストレートマスター7名が参加した。

「ないた赤おに」を活用した本授業は、授業者としてストレートマスター3名、受講者として他の6名が参加した。さらに、本模擬授業をカリキュラムに組み込んだ講義を担当する大学教員2名も同席した（表1参照）。

表1 「ないた赤おに」を活用した模擬授業の概要

<p>■日時：2025年1月30日（木）10:35～12:20 ※茨城大学大学院教育学研究科教育実践高度化専攻の講義科目「教育臨床問題と道徳」（教育方法開発コースと児童生徒支援コースの融合科目）</p> <p>■場所：茨城大学教育学部A棟 A224 模擬授業室</p> <p>■参加者：教育方法開発コース5名／児童生徒支援コース4名</p> <p>■使用教材：「ないた赤おに」</p> <p>■実施形態：学習指導案の説明5分／模擬授業時間25分／振り返り15分 ※通常、小学校において実施される45分の授業を25分に短縮</p>
--

表1に基づき、本模擬授業では、授業の撮影、Microsoft Formsを活用した振り返りの実施、それに基づく全体共有を実施した。本論文で行う模擬授業の分析は、それらから得られた、受講生及び講義担当教員の発言記録に基づいて行った。

② 模擬授業実施に当たり作成された学習指導案

本模擬授業を実施するに当たり、以下のような学習指導案が作成された。

第 4 学年〇組 道徳学習指導案

日 時：令和6年 7月 19日（金）第1限

授業者：氏名 【導入】 ○○ ○○

授業者：氏名 【展開】 ○○ ○○

授業者：氏名 【終末】 ○○ ○○

場 所： 第 4 学年〇組（小学校）

1 児童・生徒の実態・課題について（箇条書きでも構いません）

短絡的な思考が多い。男女の差が大きい。仲はいいけれど、ふとしたときに喧嘩に発展してしまう。仲の良い悪いははっきりしている。

2 子どもたちに理解してもらいたい道徳的価値（内容項目） 友情，信頼

3 教材について

（1）教材名 「ないた赤おに」(一)

（2）教材について（概要）

省略

（3）子どもたちに最も注目してもらいたい教材の箇所（※箇条書きで記すこと）

ただ寂しいから人間の友達が欲しい赤おにが、青おにという本当の友達に値する存在に気付いた最終場面。その場面において赤おにの心情がどのように変化し、涙を流したのかについて考えていけるようにしたい。

（4）本授業のねらい（※「〇〇を通して、△△に気づき、□□を養う」を踏まえつつ、適宜修正して作成ください）

赤おにの心情の変化等について意見交換をすることを通して、本当の友達とはどのような存在なのかについて気づき、友情を深め相手を思いやる態度を養う。

4 評価の観点（※該当する観点に関して、どの段階に達成することが望ましいか記すこと）

省略

5 展開

過程	教師の説明・指示・発問	指導上の留意点
導入	<p>1 あいさつ</p> <p>2 発問「友達とはどのような人ですか。」 (予想される児童の答え)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・よく一緒に遊ぶ人 ・家が近くて一緒に学校に行く人 <p>3 前半部分の範読、あらすじの確認</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・友達について、色々な考えをもっている人がいることに気付かせる。 ・目だけで追うことが苦手な児童は指なども使って追っていけるようにする。 ・あらすじの確認は要点を押さえて短く行う。 ・赤おににとって青おにがどのような存在であるかをつかませる。
展開	<p>4 発問「青おには赤おににとって友達ですか。」 →黒板にネームプレートを貼る (予想される児童の答え)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・友達だ →自分のことを助けてくれたから。 ・友達ではない →友達なら殴ったりはしないから。 <p>5 後半部分の範読、あらすじの確認</p> <p>6 発問「人間の友達がたくさんできたのにしくしくと涙をながしてないのはどうしてだろう。」 補助発問「どうして泣くほどなんだろう。」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・意見がどちらかに集中した場合には逆側からの質問をしてゆさぶり、考えを深めさせる。 <p>例)・友達だ →赤おには青おにのことを殴っているよ？ ・友達ではない →友達ではない人のことを助けますか？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「はい」か「いいえ」で答えた児童には、そう考えた根拠を明確にさせる。 ・本文から読み取れることを、児童と一緒に確認する。 ・何人か発表したら、「どうして泣くほどなのか」と発問をすることで、<u>本当の友達</u>について考えるきっかけをつくる。 ・青おにの存在がどういうものだったのかを子供の言葉を使って簡単にまとめ、終末の発問につなげる。
終末	<p>7 発問「あなたにとっての本当の友達とはどのような人ですか」</p> <p>8 全体で共有する</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・赤おにと青おにの関係について考えた上で、自分にとっての本当の友達について考えさせる。 ・友達と本当の友達の違いについて考えることができる児童には、そのことについて書かせる。それが難しい児童の場合は、導入との違いについて書かせる。 ・発表することが難しそうな場合には、教師が集めて名前を伏せた状態で紹介する。

(3) アンケートの回答結果とその分析

①学習指導案の作成に関する振り返り

学習指導案作成後、「ないた赤おに」の教材研究を行った受講生より、Microsoft Teams を通じて以下のような回答を得た。まず、その質問事項は次の通りである（表 2 参照）。

表 2 学習指導案作成に関するアンケート

1. 今回扱った読み物教材の名前を書いてください
*

回答を入力してください

2. 今回扱った読み物教材を読んだ感想を書いてください。＊特に授業実践する上での感想をお願いします。
*

回答を入力してください

3. 今回の学習指導案を作成するにあたって、どのような感想を持ちましたか？
*

答えの選択

- 非常に難しかった
- 少し難しかった
- それほど難しくなかった
- 難しくなかった

4. 質問1について、「非常に難しかった」「難しかった」と回答した理由をお聞かせください（複数選択可）

- 読み物教材の登場人物の立場や状況が子供が想像するのが難しそうに思えたから
- 読み物教材の登場人物の立場に立つのが授業者自身としても難しかったから
- 読み物教材を通して伝えたいことを見定めるのが難しかったから
- 「学習指導要領解説」に記載された内容項目を授業に反映させるのが難しかったから
- 本教材を用いた授業の導入を考えるのが難しかったから
- 本教材を用いた授業の発問のつながりを考えるのが難しかったから
- 本教材を用いた授業の締めくくりを考えるのが難しかったから
- 本教材と子供の知識・理解・経験との結びつきをつけるのが難しかったから
- 授業で子供が何と答えるか想像するのが難しかったから
- その他

5. 質問1について、「それほど難しかった」「難しくなかった」と回答した理由をお聞かせください（複数選択可）

- 読み物教材の登場人物の立場や状況を子供が想像するのは難しくないように思えたから
- 授業者自身として、読み物教材の登場人物の立場に立つことは難しくなかったから
- 読み物教材を通して伝えたいことを見定めるのが難しくなかったから
- 「学習指導要領解説」に記載された内容項目を授業に反映させるのが難しくなかったから
- 本教材を用いた授業の導入を考えるのが難しくなかったから
- 本教材を用いた授業の発問のつながりを考えるのが難しくなかったから
- 本教材を用いた授業の締めくくりを考えるのが難しくなかったから
- 本教材と子供の知識・理解・経験との結びつきをつけるのが難しくなかったから
- 授業で子供が何と答えるか想像するのが難しくなかったから
- その他

6. 今回の学習指導案の作成に関して、全般的な感想を書いてください。*

回答を入力してください

「ないた赤おに」を使用した学習指導案を作成した受講生3名の回答は次の通りである（表3参照）。

表3 「ないた赤おに」の学習指導案作成に関するアンケート回答結果

【受講生A】

2. 今回扱った読み物教材を読んだ感想を書いてください。※特に授業実践する上での感想をお願いします。

「友達」という小学4年生にとって分かりやすい内容であり、多少青おにからの手紙などがある分、分量は多いような気はしたが、内容は入ってきやすい教材のように思う。友達だからすること、しないことが子供たちの中にはあるはずだが、本文には殴ったり言い合いをする描写が描かれており、矛盾なども発問には使えるように感じる。また、「本当の」という言葉に落とし込む難しさは、青おにと人間の2つが具体的に描かれているため、そこまでないように感じる。本教材は赤おに視点で描かれているが、学年を変えれば青おに視点での授業も可能にはなってくるのではないかと思う。

3. 今回の学習指導案を作成するにあたって、どのような感想を持ちましたか？

それほど難しくなかった

4.質問1について、「非常に難しかった」「難しかった」と回答した理由をお聞かせください（複数選択可）

- 読み物教材の登場人物の立場に立つのが授業者自身としても難しかったから
- 授業者自身として、読み物教材の登場人物の立場に立つことは難しくなかったから
- 読み物教材を通して伝えたいことを見定めるのが難しくなかったから
- 本教材を用いた授業の締めくくりを考えるのが難しくなかったから

5.今回の学習指導案の作成に関して、全般的な感想を書いてください。

道徳の授業に求めることや、やりたい授業展開の発想は、やはり各々違うものをもっていると感じた。価値項目が「信頼・友情」となるような教材について指導案を考えたが、これが「生命の尊重」など、子供たちが具体的に考えることが難しいものになったときに、うまく授業を設計できるかという疑問は残っている。そのため、今回の指導案作成で、他の人と授業を設計でき、たくさんの学びを得ることはできたが、道徳の授業に対して自信が持てたかと問われると、そうではないかなという感想をもった。

【受講生 B】

2.今回扱った読み物教材を読んだ感想を書いてください。※特に授業実践する上での感想をお願いします。

価値項目が友情、信頼であろうとすぐにわかる内容で、子供たちにも内容が入りやすい教材であると感じた。ただ友だちが多くいてほしいと考えていた赤おにが、青おにという本当の友達存在に気が付いた場面を子供たちとも共有し、本当の友達について自分なりに考えたり、クラスで出た意見などから考えを深めたりさせていきたい教材であると考えた。小学校の国語の教材としても取り上げられているので知っている児童が多いと考えられるため、ゆさぶりとなるような発問を考える必要があると考えた。

3.今回の学習指導案を作成するにあたって、どのような感想を持ちましたか？

それほど難しくなかった

4.質問1について、「非常に難しかった」「難しかった」と回答した理由をお聞かせください（複数選択可）

- 読み物教材の登場人物の立場や状況が子供が想像するのが難しそうに思えたから
- 読み物教材を通して伝えたいことを見定めるのが難しくなかったから
- 「学習指導要領解説」に記載された内容項目を授業に反映させるのが難しくなかったから
- 本教材を用いた授業の発問のつながりを考えるのが難しくなかったから

5.今回の学習指導案の作成に関して、全般的な感想を書いてください。

自分だけでなく、メンバーと一緒に学習指導案を考えることは意見をまとめていくしかないのが難しく感じる部分もあるが、色々な見方や考え方が出てくるのでその中から子供の実態に合うものを選んで作り上げていくことは楽しく感じた。

自分が現職であるということで2人がやりずらく感じてしまっていないかが不安な気持ちとしてあった。自分の考えはできるだけ後から出すようにして、自分の考えを言ってもらえるようにしていた。

学校に入ると道徳は自分1人で考えることが多くなってしまふ。毎回は難しいが複数クラスの学年であれば学年内の先生と、単学級であればブロックや特別支援の先生と一緒に教材について話をしたりすることはその先生方にとって有意義な時間になるのではないかと考えた。

【受講生 C】

2.今回扱った読み物教材を読んだ感想を書いてください。※特に授業実践する上での感想をお願いします。

赤おにが後悔して終わるから、自分は後悔しないようになりそう。赤おにの印象が場面によって変わるため、児童の意見に変化が出そう。

3. 今回の学習指導案を作成するにあたって、どのような感想を持ちましたか？

非常に難しかった

4. 質問1について、「非常に難しかった」「難しかった」と回答した理由をお聞かせください（複数選択可）

- 「学習指導要領解説」に記載された内容項目を授業に反映させるのが難しかったから
- 本教材を用いた授業の導入を考えるのが難しかったから
- 本教材を用いた授業の発問のつながりを考えるのが難しかったから
- 本教材を用いた授業の締めくくりを考えるのが難しかったから
- 授業で子供が何と答えるか想像するのが難しかったから

5. 今回の学習指導案の作成に関して、全般的な感想を書いてください。

教材で自分が児童に聞いてみたいと思ったところが、指導要領の内容項目に沿っているとは限らないため、内容項目に沿っていて、かつ繋がりのある発問をしなくてはならないことがわかった。また、発問の中でも重要度によって答え方を工夫して、時間内に終わらせる必要があることが分かった。

学習指導案の作成及び模擬授業を担当した三人に共通する点は、以下の通りである。まず、「教材の価値項目を選定し、学習指導要領に適合させること」、「登場人物や子どもの思考をどこまで把握し、授業で扱うか見極めるのが難しいこと」、「発問や締めくくりを考える際、子どもの想定外の応答を踏まえにくいこと」といった課題があげられた。また、学習指導案づくり・教材研究を授業に生かす点については、「子どもの生活経験や現実との関連付けに苦慮すること」、「授業者の意図と子どもの実態を調整し、発問を考える必要がある」ことが取り上げられた。

②授業者による模擬授業の振り返り

模擬授業実施後、授業を行った学生（教師）より、Microsoft Teams を通じて以下のような回答を得た。その質問事項及び回答内容は次の通りである（表4参照）。

表4 授業者による模擬授業の振り返り

1. あなたの属性を選んでください

授業者（教師）

2. 【授業者】実際に授業を行ってみて、学習指導案を作成していた時に浮かんだ悩みはどのように生かされましたか？

[A] 友達というワードに引っ張られて上辺だけの考えになってしまうのではないかと。→多くの意見をもらえるように色々な人を指名し、色々な考えがあることを共有したり、発表された内容に聞き返しをすることで内容を深めたりすることができた。

[B] 「友だち」からどのようにして「本当の友だち」に落とすかという点で発問を考えていったが、発問と補助発問でうまく「本当の」というところに、子供たちの思いを持っていくことができていたのではないかなと思う。また、間を作るようにしたことや、落ち着いた声のトーンを意識したことで、考える時間を作ることができたと思っています。

[C] ないた赤おにから自分のことへ、そして日常へと落とし込んでいくときに、夏休みで長期間会えないことと、青おにがしばらく会えないけどイツマデモキミノトモダチと最後に書いていたことを繋ぐことで、自分事に最後まとめることができた。

3. 【授業者】実際に授業を行ってみて、読み物教材の掘り下げる際に難しかったところがありましたか？あれば、何か書いてみてください。※ない場合は「なし」と書いてください。
- 【A】掘り下げる際の難しさではないが、教師の考えが児童に読み取られないようにしていくことが難しいと感じた。
- 【B】なし
- 【C】どこで区切れば赤おにの印象や青おにとの関係に対する印象に変化をもたせることができるか。どうやって教材を使いながら「本当の友達」にもっていくことができるか。
4. 【授業者】実際に授業を行ってみて、子供の発言への返答で困ったことはありましたか？※ない場合は「なし」と書いてください。
- 【A】なし
- 【B】返答そのものが子供の発言の要約（分かりやすくまとめたもの）になってしまわないかが難しかった。子供のそのままの文章から、他の子供が感じることもあると思うので、できるだけ子供の発言はそのまま教師側で整理せず板書しようとしたり、返答しようとしたが、考えすぎてよく分からなくなってしまった。
- 【C】なし
5. 本授業に関する全般的な感想を書いてください。
- 【A】教材が素直で、何となくでも授業自体は成立してしまう教材であったので、その中で本当の友達に迫るための発問を考えることは難しいと感じた。短くしている授業なので、時間が気になってしまった。焦りが周りに伝わらないようにしていこうと考えていたが、うまく次の人にはつなげなかったように感じた。
- 【B】発問と発問のつなぎ方や、子供の発言に対しての返答など、アドリブ的な決まっていな部分の話し方が難しかった。できれば、もっと一人の考えを掘ってみたいかった。なぜそう考えたのか理由を細かく聞いたら、他の子供も新しい発見があり、本当の友達についての考えを深めることができたのではないかなと思う。緊張と不安で、思うようにいかなかった。
- 【C】誘導しないようにして、友達と本当の友達の違いに気づかせて、自分の言葉でまとめさせることは難しかった。初めて縦書きの板書をしたが、横書きよりも難しかった。

模擬授業を行った三人の感想に共通する点として、「授業の進行や時間配分が困難であったこと」があげられる。元々、授業準備の段階から、「互いの意見を深く掘り下げる発問作りが難しく、子どもの考えを引き出す工夫が不足していた」こともあげられた。加えて、実際の授業中に関しては、「本当の友達という主題を扱う中で緊張や不安から円滑な応答がやや難しかったこと」、「子どもの発言を掘り下げる機会を逃し、友達に関する理解を得る機会を活かせなかった」こともあげられた。

以上の課題は、実際に授業を行ってみたことで気づいたものといえる。授業者にとってはあらかじめ見通せていけばよかったと思えるものであるかもしれないが、それは逆に、道徳科の授業実践の難しさを改めて認識する視点を提供するものといえる。

③受講者（子供役）による模擬授業に関する感想

模擬授業実施後、授業を受けた学生（子供）より、Microsoft Teams を通じて以下のような回答を得た。その質問事項及び回答内容は次の通りである（表5参照）。

表5 受講者による模擬授業の振り返り

1. あなたの属性を選んでください
受講者（子供）

2. 【受講者】実際に授業を受けてみて、授業者の発問で答えにくかった／考えにくかったところはありましたか？あれば、何か書いてみてください。※ない場合は「なし」と書いてください。

- ・「本当の友だちとはどんな人？」が答えにくかった。
- ・「青おには赤おににとって友達か」という発問に友達でないと答えた子は、その後の「なぜ赤おには泣いていたのか」という発問には答えにくいと感じた。

3. 【受講者】実際に授業を受けてみて、教材についてもう少し掘り下げたかった（もっと考えたかった）ところはありましたか？あれば、何か書いてみてください。※ない場合は「なし」と書いてください。

- ・なんで青鬼は村を襲おうと思ったのか
- ・本当の友達とはどんな人？
- ・赤おにが首のところをしめた部分。友だちに行くことなのだろうか、やっていいことなのか掘ると面白いかなと思いました。
- ・本当の友達について。最後に上がった、相手のことを考えられるは親切になってしまうのかと思いました。友情と親切の違いについて掘り下げたいと感じました。
- ・実際に村で赤おにと青おにが一芝居うつシーンを掘り下げ、お互いの配慮について目を向けると、さらに友達についての考えを深められたかもしれないと感じた。
- ・赤おにと青おにが友達だったのかどうかをもっと考えたかった、「本当の」友だちってどんな人なのかももう少し掘り下げたかった

4. 【受講者】実際に授業を受けてみて、最も頭に残ったことはどのようなことでしたか？

- ・赤鬼と青鬼が本当に友達なのかという根本的なところを考えさせられたところ
- ・ネームを使って心情を表す活動により思考を促されました。
- ・青おにと離れてしまって涙を流すほどかなしいこと。
- ・「人間の友達ができたのにどうして涙を流したのか」の部分。友達ではないと考えている側の意見は聞けなかった点。授業の展開としては、友達派閥を聞いた方が展開しやすいが友達ではない派閥を聞いてゆさぶりをかけてみても「友情」に近づくことはできるように思いました。
- ・最後の、本当の友達とは何かということについての説話
- ・赤おにと青おにが友だちだと思うか（思わないか）を考えたときに、意見が分かれたこと

5. 本授業に関する全般的な感想を書いてください。

- ・非常にわかりやすく授業が展開されていて、話さない時間がないように感じられた。クラスの雰囲気もワイワイとはしゃいでうるさくなるのではなく、しっかりと議論ができるクラスになっていくと感じた。
- ・ネームを使って心情を表すことで、全員参加の授業ができていて良いなと思いました。最後の説話が「本当の友達」=会えないときにも相手のことを考えられる人のような印象が残りましたが、この教材でつかませるのはそこでよいのかという疑問がわきました。
- ・最初から青おにを友だちと思っている児童にとって、「嫌なことを無理やりさせられている」という友だちとは思わない側の意見がとても新鮮なものになると思いましたし、実際にそうでした。普段何気なく使う「友だち」という言葉について考えさせられ、これからどう接しているか考えるきっかけになるような授業だと思いました。ただ、教科書の記述から青おにを友だちであると認識している児童に関しては、その後の赤おにの行動から考えを揺さぶってみても面白いのかなと思いました。そうすると、「友だち」という概念的なものについて全員が教材を通して考えられることにつながるのかなと感じました。
- ・授業全体を通して、発言を拾ってくれる安心感がありました。授業者が聞くだけでなく、一言返答する姿勢が大きく影響したと思います。ゆさぶりも積極的に行なっていたように思います。終末では意見を深掘りするとさらに「友情」がクリアに感じられるのかなと思いました。
- ・児童に寄り添った発問や道徳らしい優しい口調や声のトーンで進んでいく授業だと感じ、受けていて心地よかったです。

・発問に一貫性があり、授業全体としての流れは良かったと感じる。導入で友だちとはどのような人かを考えさせ、終末で本当の友だちについて考えさせることで授業中の考えの変容を見とる、またそれを板書することで児童も実感できる工夫が見られた。赤おにと青おにの関係性に関する発問で意見が分かれた際に、2人の鬼が友だちなのか明確にならないまま授業が進行した。それ自体は児童の持つ様々な見方や考え方を尊重するものとして良いと思った。その次の赤おにが涙を流した理由を問う発問は両者がやはり友だちであったという考えにつながりそうなものだったが、前の発問において「友だちじゃない」と考えた児童の考えを再考すると効果的だったのではないかと考える。「友だちじゃない→離れるのが寂しいから→2人は友だちだと思う（もしくは、それでも友だちじゃない）」というように2つの発問を往還することで最後の「本当の友だち」を尋ねる発問がより考えやすくなったのではないかと感じる。

以上のように、本模擬授業を受けた受講生の感想を参照してみると、全般的に肯定的な意見が出されていることが注目される。具体的には、授業を担当した三名の学生の人となりや授業時の態度に起因するところが大きいと言えるが、授業中に受講者側の意見を受け止める姿勢に共感する意見が多かった。また、ネームプレートを貼ることによって、自他の立場が可視化されることの効果に注目する意見のように、授業時に用いられる教具の有効性を伝えるものも認められた。

その一方で、本模擬授業において、本当に「友だち（友情）」という道徳的価値観の理解が深まったか・広がったかに関しては課題があることが認められる。授業者は、おそらくはその点を意識して、「青おには赤おににとって友だちか？」というゆさぶりの効果を発揮する発問を用意していたものの、その効果を十二分に発揮することは叶わなかったようである。その課題を解消する手立ては、最後にあげられた感想のように、発問のつながりを意識する点にあるようである。これは、ゆさぶりの発問はそれ単独で機能するわけではなく、その前後の発問との結びつきを構想することが大切であるということの意味しているといえる。

おわりに

以上の考察を通じて、授業時におけるゆさぶりの重要性が改めて認識された。たとえ、子ども主体の授業を目指す場合においても、授業で取り上げる論点や深めたいポイントのすべてを子どもに任せることが望ましいというわけではない。教師が事前に用意しておいたゆさぶりと、子どもの発言を受けて臨機応変に出されたゆさぶりにより、形式としては理解・思考の機会を教師が作り、教師の主導で授業が進むものであっても、実質的に子どもが主体的に学ぶ授業が成り立つことになる。今後も、子どもが主体的に思考する道徳科の授業づくりのポイントを探っていきたい。

謝辞

本研究の一部は日本学術振興会学術研究助成基金助成金 基盤研究B（課題番号 23H00993，研究代表者：打越正貴）の助成を受けて行われた。

注

- 1) 「ゆさぶり」が教育学／学校教育の世に広まったのは、昭和の授業名人である斎藤喜博によるところが大きい。特に、斎藤の取り上げた小学校国語科における『『出口』実践』及びその後起こった論争を参照。斎藤喜博の「出口」実践を「ゆさぶり」の最たる例と位置づけるものとして、吉田や吉本があげられる。例えば、以下を参照。
 - ・吉田章宏『授業の心理学をめざして』（国土社，1975）。
 - ・吉本均編『集団思考の成立とは何か』（明治図書，1975）。
- 2) その他、「友情」「信頼」の外延として、「それは家族関係や友人関係に限定されるものなのか」、「学校や地域社会、さらには国際社会といったより大きなコミュニティへも拡張できるのか」というように、言葉（語）のカバーする範囲についても多様性が認められる。
- 3) 斎藤喜博『教育学のすすめ』（筑摩書房，1980），157-159。
- 4) 加藤宣行・竹井秀文（編著）『実践から学ぶ 深く考える道徳授業』（光文書院，2015），76。